

生井英考先生の定年退職にあたって

生井英考先生は2020年3月に定年を迎え、立教大学社会学部を退職されました。先生は共立女子大学国際学部から2011年4月に着任され、メディア社会学科に所属されました。ご専門の視覚文化論やアメリカ文化研究の分野では、パイオニア的な研究を展開されてきました。ご著書の『ジャングル・クルーズにうってつけの日 ヴェトナム戦争の文化とイメージ』（初版1987年、改訂増補文庫版1993年、新版2000年、岩波現代文庫版2015年）では、文学、映画、写真、当時の報道や政治状況に至るまで、さまざまな資料を検討して、幅広い視野から論考されています。先生は、その後も映像や写真などの視覚的な情報の整理から当時の社会状況に至るまで多面的な考察によって、文化の変容を描いてこられました。

1993年には第2回「バベル国際翻訳大賞」文学部門賞受賞（ティム・オブライエン『カチアートを追跡して』の邦語訳業に対して）を受賞されました。その後も豊かで確かな知見の執筆活動を続けられています。『空の帝国 アメリカの20世紀』（2006年、講談社学術文庫版2018年）では「空の軍事大国」となったアメリカを通して「戦争の世紀」を描写されました。この本は、中国語で翻訳出版されています。また先生が2000年にはじめられた『読売新聞』「デザイン季評」のご執筆は、20年を越える連載で、現代社会の諸相をさまざまな側面から俯瞰されています。

先生のアメリカ研究は、20世紀の文明論としても位置付けられます。学会では、アメリカ学会の常務理事（2006年～2016年）、副会長（2016年～2018年）、アメリカ史研究会（現・日本アメリカ史学会）の『アメリカ史研究』編集委員（1999年～2003年）を歴任されました。アメリカ研究だけでなく、映像や写真を含めた研究展開による幅広い分野で多大な貢献があります。東京都写真美術館評価委員（1997年～2006年）、「竹尾賞」選考委員（1998年～2006年）、2020年4月からは『朝日新聞』書評委員に就かれています。

社会学部メディア社会学科長（2015年4月～2017年3月）、立教大学アメリカ研究所員、同研究所所長（2013年4月～2017年3月）として、先生は立教大学の教育や研究のためにたいへんご尽力されました。学部や大学院の授業で、「集合的記憶とメディア表彰」のテーマに文化史や地域研究の方法で、学生の社会的な想像力に訴え、多くの学生に敬愛されてきました。これまで多大なる貢献をされましたこと、感謝の念に堪えません。

エネルギッシュな先生ですが、今後ご健康に留意され、またますますご活躍されることを心よりお祈りいたします。

2021年3月

社会学部長

水 上 徹 男